

## 大分県大野郡緒方町大石遺跡の調査

— 縄文晩期初頭磨製石器の新例 —

富	阿	賀
来	南	川
雅	一	光
勝	郎	夫

## はじめに

昭和二十五年盛夏、羽田野一郎両同道にて、大石遺跡の現場調査を行つたことがある。祖母山麓に近い広大な河岸段丘に展開する遺物の散布状態は、まさに晩期初頭の一時期に局限され、特定時期遺跡の研究にはごく良好な状態の遺物であると観察された。しかも採集遺物には、多量の扁平石鏃と考えられるものが含まれ、単純な晩期土器以外に他遺物の存在をみない。今日、縄文文化の終末期における農耕文化の存否についての論議もあり、本遺跡調査の実施が、その問題にあたる影響大であることを思い、調査準備を行うことにした。しかも実際の調査にあつては、緒方町教育委員会に多大の援助を得る結果となつた。

## (一) 遺跡とその環境

県内を東にむかつて横断する東九州最大の大野川は、阿蘇、九住、祖母の九州山脈中央部に源がある。この大野川は、中流

附近で、祖母山塊に発する緒方川の合流して水勢を増す。この合流点より二九軒附近に標高三五〇米前後の山脈が東西に走りその先端附近、舌状に延びる段丘が大石遺跡である。遺物散布の範囲は、東西一軒、南北五〇〇米で、調査は、遺物散布の濃密な台地西部をえらび行われた。

大石附近に発遠した大野、緒方両河川の沿岸に発達した段丘は、広大なものが多く、その平坦な場所には、縄文各時代の遺跡が分布する。その代表的なものとして北に木野巢石開拓地、木野巢石遺跡西側には中野開拓地などから縄文早期及び後晩期遺物の散布をみる。これら遺跡は、すべて平坦な台地上に位置し、比較的広大な位置を占める。又、台地は両側に深い谷を持つものと、比較的小谷をもつて仕切ることがあるが、それぞれ上面土類が流失或は風失のために上層を除かれたとみられ、遺物の包含層は比較的浅い。又河川が両側にある段丘で、しかも広大な規模をもつ遺跡は、その性質上、集落址を想定することができ。比較的水にも便利で、祖母や阿蘇に近く、加工し易い石材採集も容易であることなど、集落立地には絶好の場所である。このような好条件の段丘が、本遺跡周辺に存在するところから、いまだ土をかぶつて遺跡の存否不明とされているものの中に、まだまだ重要遺跡多数が含まれると推定される。そのような状態で、本遺跡は、ほんの一塊の集落址であるが、後述資料の如く、本遺跡が非常に重要であることを知る手掛りを得たのは幸いなことであつた。

## (二)、遺物出土の地層について

前述の如く遺跡は段丘上の平坦な部分に位置し、そのために上層土類の除去が自然に行われた可能性が強く、遺物包含層は比較的浅く、黒色の火山灰層が一枚（耕土を含む）平均三五糧程度の厚味をもつて包含層上部に位置しただけである。以下層序について上層より記録する。

黒色表土層（一層）、現在耕作土となつている腐蝕質の表土層で、厚さ一〇〜二〇cm、土色は黒色を呈し、軽い軟質の土層である。下層の黒色土層とは明確に一線で区別され、耕作の限度をしめす。

黒色土層（II層）、層厚は南より北に向つてやや薄く北方で二〇糎、南で三〇糎の傾斜をもつ。土質は黒色火山灰で、上層に比較し湿気を多少含み、緻密でつやのある硬質、黒色土層である。本層には遺物の包含がみとめられない。

黒褐色土層（III層）層厚四十糎前後、黒褐色粘質土層である。当遺跡における遺物包含層はこの層に限られた。本層には石鏃、安山岩剥片、浅鉢型土器、胴部に比較的張りのある深鉢型土器、頸部長く張りのある鉢土器の出土をみたが、層位と見做すことはできず、いづれも皆黒色研磨光沢のあるで、セツト関係をなす。

赤褐色土層（IV層）層厚二十糎前後で土色は赤褐色をなし断面が鮮明でねばりがある。下の角礫混褐色土層との漸移層であらう。

角礫混褐色土層（V層）層厚四十五糎前後う細かい角礫を混入した褐色土層である。下層の褐色土層に整合にのる。

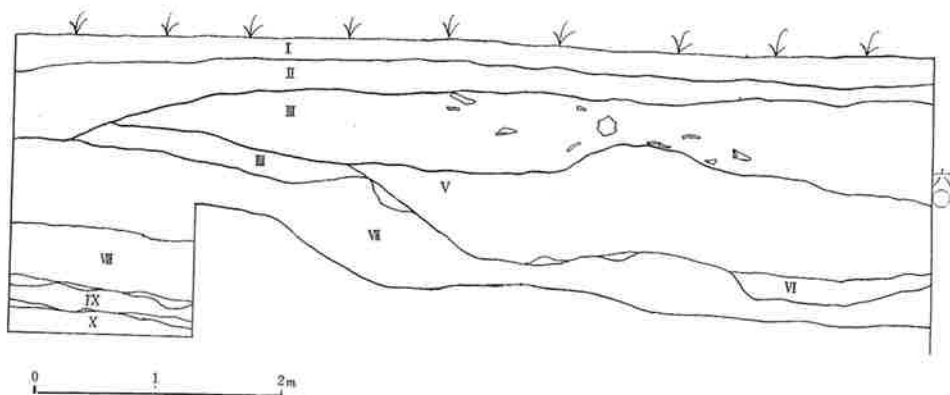
褐色土層（VI層）層厚二十糎前後の褐色土層である。乾くと柱状に亀裂を生じ、比較的緻密な粘質の土層である。

淡青色土層（VII層）層厚五糎前後の淡青色を呈し、性質がVI層に類似し、層の漸移層であると思われる。

白褐色土層（VIII層）層厚十糎前後の白味の強い褐色土層で粒状をなしている。

黄褐色土層（IX層）層厚五糎前後で土色は黄色の強い粘質の土層である。下層の角礫層との漸移層であらう。

角礫層（X層）安山岩の風化層で、下部安山岩と共に基盤をなす。



第1図 大石遺跡第IIトレンチ層位図

以上の如く大石遺跡の層位を概観すると上部第一層よりⅩ層に区別され遺物は黒褐色を呈するⅢ層より出土するのみで、遺物の先後関係を決する如き層序を認めない。したがって本遺物色合層は一定時期の遺物を単純に出土するものであり、それぞれ一つの組み物としての意味を持ち、同時期的観察をすることができる。又この遺物包含層以外には何ら他遺物の混入を許さない程度の整然とした層位を保っており、本遺物の特徴として同一時期堆積、他類遺物の混入を認めない良好な遺跡といふことができる。

### （三）住居跡

住居跡の存在はⅢ層下底面において平地式の柱穴の存在で確認された。本遺跡で確認されたものは、一部プランが重複していたが、全体で五個の家屋を数えた。

一号住居跡、二、五〇×二、九〇米の方形で、主柱は四隅に存し、各辺のやや外側に各々一個の補助柱をみる。炉址は屋内の北寄りに存しているが、石組などの特殊な構造をみず、単に燃焼による赤土が確認された程度にとどまる。

二号住居跡、二、五〇×二、一〇米の短形をし、南西隅、北西隅の隅柱が、定位置にないがその他南側の中央、西側の中央に各々一個の柱穴が線上に並ぶところから、定位置に存在しない柱穴の位置には礎盤などを想定することができる。炉は一号同様比寄りに存し土類の焼度が著しい。

三号住居跡、二、五〇×二、一五米の短形で北東隅の位置を除き、整然とした柱穴が存在する。南東隅には、補助柱を含めて、相当強い柱組の存在を想定することができる。三号は、二号に重複しており、二号との先後関係は不明である。

四号住居跡、三、五〇×二、四〇米の東西に長い短形状の平地住居で、南東隅に柱穴を欠く。炉址は西寄りに存し、過度燃焼による練瓦状部分は一〇糧に及んだ。

五号住居跡、完掘をみず、東側に未掘の部分を残す。形状は一ノ四号と同じで、平地式をなす。

以上一〜五号住居趾は、すべて平地式の方形プラン、内部に簡単な炉趾を設ける。全体が狭い部処に密集し、一部は重複しているところから、これらの中には一部時期の先後関係があることは確実である。一、二、五号は形態が方形に近く、三、四

号が短形をなすところから、この二組の存在を先後に区別する理由とすることもできる。又一号と四号の間に、焼石類があるまともつてをりも発見される。集落共用の屋外炉趾であろうか。

さて、この平地式、至極簡素な構造の住居趾は、九州において縄文晩期にしばしばみられる統一形態で、佐賀県女山<sup>①</sup>、長崎県小浜<sup>②</sup>、礪石原遺跡<sup>③</sup>など類例は少くない。特に女山の住居形態に近似しているこれら北部九州の例は、いずれも縄文晩期初頭の黒色研磨の土器を出土するものであり、この点本遺跡に共通である。

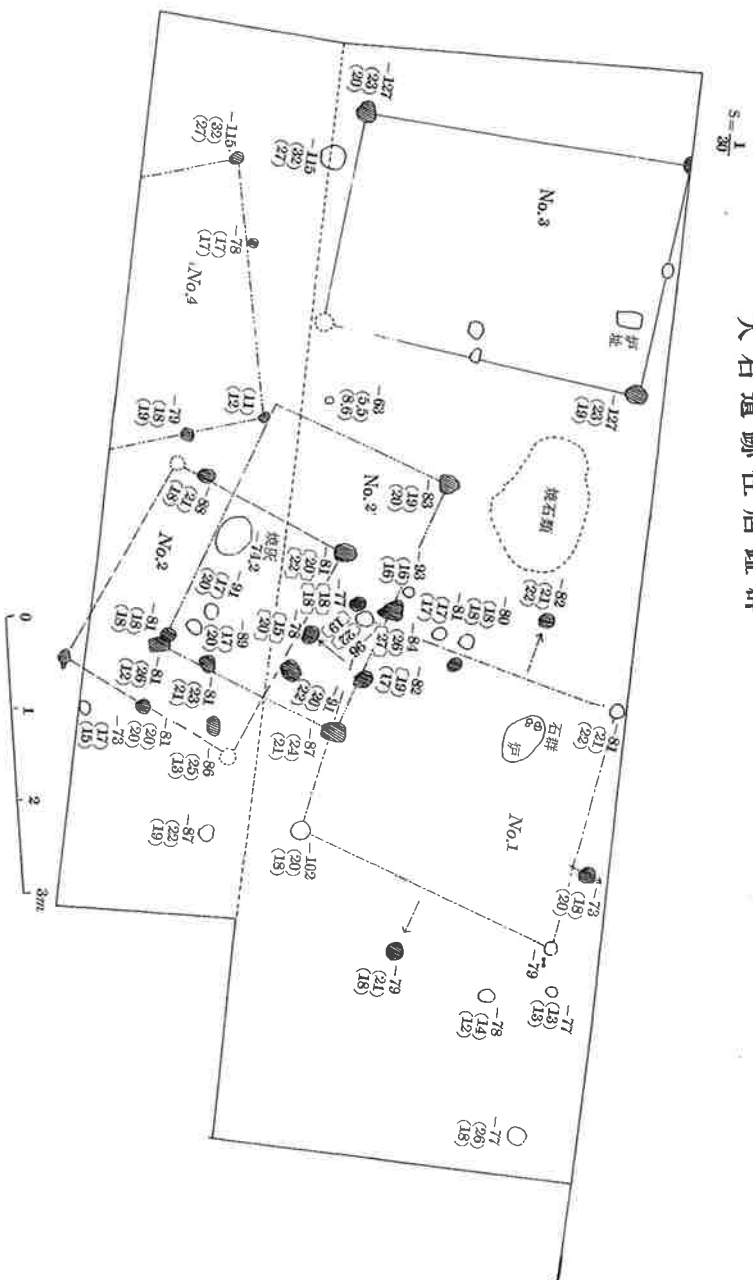
#### 四 磨製石器の出土

本遺跡出土遺物は土器石器に限られる。土器類は単純な鉢形、皿形に統一され、黒色に研磨された晩期初頭のものであるが、これについてはいざれ改めて草稿をこころみる。所謂三万田、後領式土器と汎称されるものに近似形のこの晩期土器共伴の石器は、打製扁平な鉄形石器が全体の六五%を占め、農耕の存在を暗示する。この鉄形石器に混つて、磨製石器が数点発見されて興味をひいた。

本稿は主として磨製石器の中で、特に晩期稀有なものの数例を挙げて問

住居趾	主軸方向	面積 平方m	炉	柱 穴	形状
第一号住居趾	EW	290×250	東北寄り 不整楕円形 石群	支柱 4 他 3	方形
二号住居趾	SN	250×210	北寄り 不整楕円形 中央	支柱 2 他 5	短形
三号住居趾	SN	250×215		支柱 4 他 3	短形
四号住居趾	EW	350×240	東寄り 長方形	支柱 3 他 3	短形
五号住居趾	EW	280×?		支柱 2 他 2	方形

# 大石遺跡住居跡群



第2図 敷師一は深さ、( ) 内数字は横穴の大きさ

題を提起したい。

(一) 全磨製石包丁形石器

玄武岩の剝片を半月状梯形に加工し、全面を研磨してその側面、底部を研ぎ刃部を作る。磨痕は不規則に剝離された全面に施し、平滑とする。使用部は梯形部各辺の刃部全部にわたるが、特に底面と上部使用痕跡が著しく刃こぼれが多い。側面の使用痕は軽微で、そのために両面より研いだ刃部が明確に残る。

大きさは長径上部九、七糎、底部五糎、短径四、五糎で、玄武岩を使用、緑色をなす。形状は前述の如く半月、梯形をなし、断面の厚さ四、五糎を算える。

(二) 全磨石包丁形石器片

色調黒色となすスレート石を使用し、半月形を呈する(一)同様の石器である。両面を全磨して面の双方より刃部を研ぐ。残存部は、側面と底部の三分一程度であるが、残存部七糎×三、五糎で、(一)に比して大形である。断面最大七糎を算え、全体の形態も整い、使用痕は底部に若干の刃こぼれをみるが(一)ほどに目立たない。

(三) 全磨製扁平鍬形石器

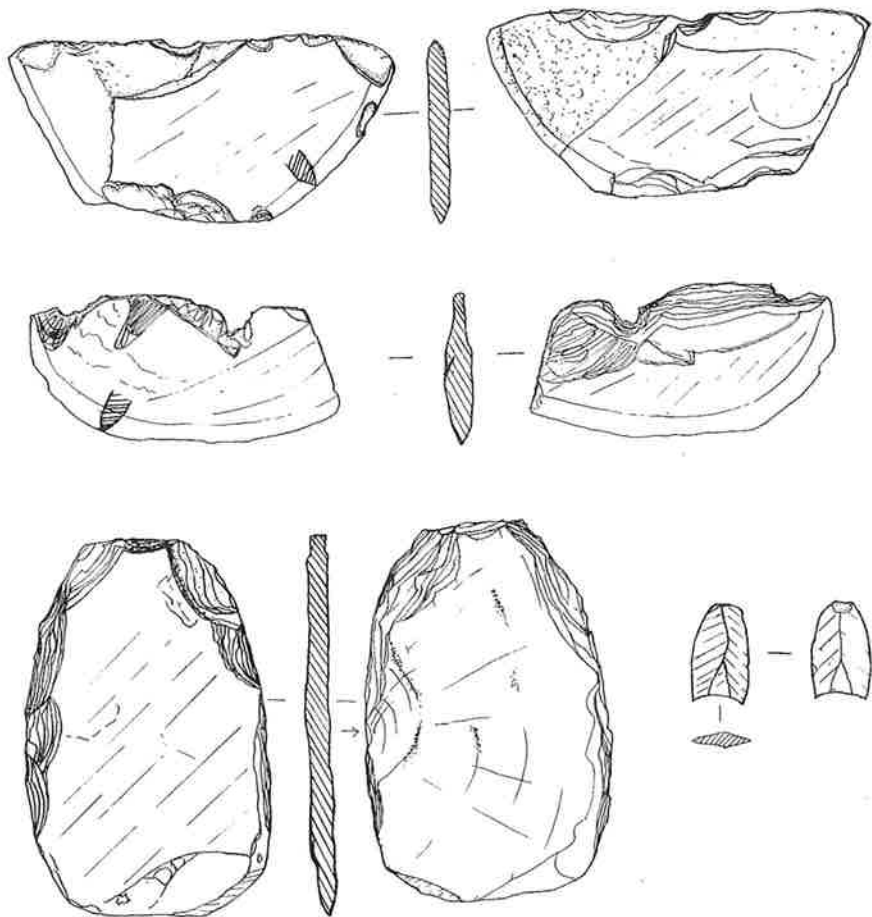
濃褐色をなす赤鉄桂岩を使用し、研磨を施して扁桃形に加工し、上部に剝離打痕を残す。両側及び底部は打製で、その一部を両側から磨き、研の強い刃部を一部に残す。縦九、五糎中六糎、断面の厚さ五糎で、刃部の使用痕跡は少い。

(四) 磨石鍬

スレート質の石材を使用した黒色の鍬で、縦二、五糎、巾一、五糎、底辺は弓状に弯曲し、先端、両側弓形に曲りながら先端尖る。中央に稿を縦に通し、銅鍬形に仕上げる。厚さ三糎で横断面稜形をなす。

(五) その他磨石器

以上、稀有な全磨乃至は極部打製を含めた石器以外に、本遺跡より、局部磨製の「のみ」形石器、扁平斧形石器、石刀など相



六五

第三圖 各種類磨製石器



当多量に石器の出土をみた。又これら磨製石器製作に必要な磨り石の残存も確認されて、磨製石器を作る技術、又はその量産の過程を知るためには重要な資料多数を得た。

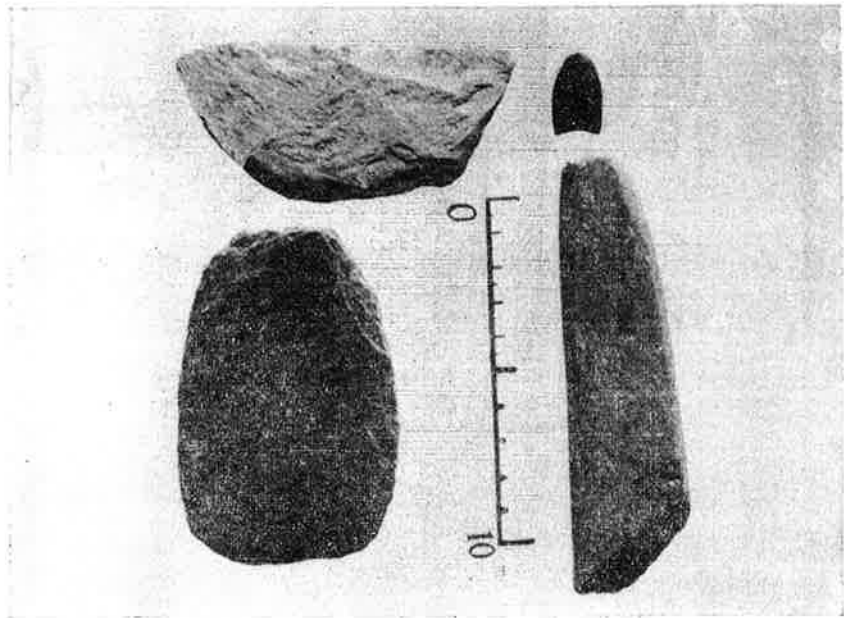
#### (五) 磨製石品の問題点

本遺跡の調査で、もつとも重要な問題は、まとまりある住居趾の群集と、それにもなう比較的単純な土器形式に終始する遺物の多量出土である。しかもそれは確実に縄文晩期初頭と断ずるものの外、他類遺物を混じらない点を力説することができる。したがつて本遺跡出土遺物は晩期初頭に定着できる。

さて前項であげた磨製石器の類は右の事情から晩期の所産と見做し、そこから左の如き問題を提起することができる。

(一) 磨製石包丁形石器は、一応その形態から、喬本科の栽培植物の収穫に使用したことが明確であること。特にその形態及び用途は弥生式時代に出土する石包丁の祖形態と判ずることが疑いでないことなどから、晩期農耕の有力な資料となる。

(二) 磨製石鍬形石器は、他の打製同類扁平石器と共に土搔を目的とした使用方法を考えることができる。耕具としての存在以外用途がないと思われるので、これ又石包丁形石器とセット関係



第4図 磨製石器

で、農耕を考えることができる。尚福岡県立岩出土の石包丁と同質材利用も興味をひく。

(三) 磨石鏃は更に問題が多い。形態、製法など弥生式石鏃と同類で、晩期遺物とは思えない程の類似をみる。しかし前述の如く、他類遺物の混入がない点、住居地面よりの発見であること。磨り石の出土などから、この石鏃のみを混入とすることは不可能と考える。しかし、この石鏃に関しては以上の理由から更に多くの遺物実証例が必要であるとの疑惑を持つ。

右三点の中、前二点は、縄文晩期の農耕問題に対して可或り具体的な資料といえることができる。稲の栽培はともかくとして農業の起源を晩期初頭に求めることは最早動かない程度の資料といえることができよう。この農耕起源については更に北部九州の後晩期剥片石器の出土から細論を近く提出することにした。

注 ① 日本考古学協会西北九州特別委員会（鏡山猛）「高原半島及び唐津市の考古学的調査」『九州考古学』一〇

② 島原半島考古学調査第二次概報（鏡山猛）「島原市礫石調査」『九州考古学』一四

③ 同右（賀川光夫）「小浜遺跡」『九州考古学』一四

(この研究には緒方町より研究費の一部を受けた)